

中国人の色の概念 それぞれの色の持つ文化的意味

張 淑 倩

The Significance and Cultural Meanings of colors for Chinese

Chang SHU-CHIEN

Chinese language has many words containing a color related Chinese character. These words not simply indicate colors but also imply other meanings deriving from these colors. In China, colors often have symbolic meanings. The present paper discusses these social, cultural, and ideological meanings of colors used in Chinese language.

序

中国語には色を使った単語が数多くある。それらは単に色を表しているだけでなく、そこから派生し、別の意味を持つこともあり、そこには濃厚な漢民族の文化的心態と感情的意義が含まれている。そのためそれらのほとんどが豊かな文化の象徴的意義を備えているといえる。

中国語は古代より豊富で多彩な色を使った単語がある。『説文解字』の部首、糸部には24個もの色の単語が出てきている。例えば、「紅・緑・紫・絳・緋・紺・絹・・・」などがそうである。ここからわかるように、中国語の色名詞の大部分は染色や紡績と密接な関係があるのではないか。

中国語の色名詞の文化象徴意義は、客観的事物の色彩を通して連想されたものが多く、それぞれの色名詞には異なる象徴意義があり、かつ時代によって各色の象徴意義も異なる。

永い中国の歴史において、時代によって崇拜される色は異なる。例えば、夏朝は青色を尊び、商朝は白、周朝は赤、秦朝は黒、漢朝は赤、そして隋・唐・宋・元・明・清朝もずっと赤を崇拜して

きた。

中国では、色と社会文化思想は密接に関係している。

中国人は早くから、「木火土金水」という五原素が天地万物を形づくるという「五行説」を定め、この五行思想に基づいた「五色」—「青赤黄白黒」を正色に規定し、季節や方位を象徴するものとして、この五色を宮殿や寺院などの建築物や社稷壇に施し、祭祀を執り行ったのを初めとして、劇俳優の衣装や顔の隈取に至るまでも、すべて五行説に基づいた五色に従ったのである。この点から見ても、中国における色とは、ただ単に色を表しているのみならず、象徴的な意味を多分に含んだものだといえる。

五色

中国では方位・色彩・季節を初めとして、生物・神・天文・徳目に至るまですべてのもの、要するに万象が五行「木火土金水」に配当されている。これらの配当にはさしたる根拠のないものもあるが、その対応するものを「木火土金水」それ

ぞれの本性と照らし合わせてみるとなんとなくなづける。つまり気を同じくするものは互いに象徴関係にあると言え、中国人にとっては、自然や物象の存在・働きをこれら「木火土金水」の五つを借りて解説・象徴するものだったのである。

特に色彩は、五行思想に従って様々のものを象徴するのに最も多く用いられた。特に見えない時間や空間の把握に最も活躍したのは五色といえよう。五色は空間では東西南北中央を象徴し、時間では春夏秋冬の四季と各季をつなぐ土用を象徴する。^{*①}『呂氏春秋』十二紀や『礼記』月令篇などの時令説を説いたものには、季節を五行に従った色彩や方位に還元し、その季節になると、すべてのものをその色に従い、天子自らもその色を身に着け、その方位に動座することによって、確実にその季節が到来すると考えられていたことが書かれている。古代中国では、自然の順当な循環によって、天下泰平・生活安定が保証されると考えられていたのだが、この目に見えない季節というものを色彩や方位に還元し、その順当な循環を祈ったのである。

現在でも北京で見られる社稷壇は別名「五色土」と称されているように、五行説に従って、中央に黄、東に青、西に白、南に赤、北に黒の五色の土が盛っており、壇を囲っている低い塀にも東西南北に配した色瓦がそれぞれ敷かれている。^{*②}『白虎通』には、人は土や穀物があるからこそ生きていけるのであるが、天子はここで春と秋に地を鎮め、豊穡を祈る祭祀を執り行ったということが書かれている。このように五行思想に基づいた五色は、目に見えない時間・空間を具象化して、天地四方を祭り、四季の順当な循環を祈願する際に必要不可欠なものだったのである。現代でも社寺や落慶式の幟にはこの五色が施されているが、それは五色がこのように時間・空間などを初めとした宇宙万物を象徴し、それによって天下泰平・民生

安定を祈ったからに他ならない。つまりこの「五色」によって保障されるものは民生保障の根源としての宇宙そのものなのである。

ところで中国では端午節に五色の糸を手足に巻きつけたり、お金を通して首飾りにしたり、小さな人形を作って頭に挿して鬘にしたり、それらを巻きつけた粽を送り合ったりする習俗がある。五色の糸には厄払いの意があると見なされ、それを巻きつけることによって健康・幸福を祈ったのであるが、このような習俗も先に述べたような思想と無関係ではないだろう。また古代では五行思想に基づいた四方を象徴する神—朱鳥・玄武・青龍・白虎の四神を旗に描き、これによって前後左右の軍陣を表明し、保護神としていたことが^{*③}『礼記』に書かれているが、五色糸の習俗は「避兵」とも称されており、こういったことから五色糸を巻きつけて自身の守り神とされるようになったと思われる。

日本では、鯉のぼりを飾るが、中国では「魚」と「余」が同じ音なために縁起が良いとされているが、五色のあでやかな鯉を飾ることも、これとは無関係ではないだろう。

色は人間生活には身近で理解しやすいためだろうか、このように様々なものを象徴するのに用いられ、五行配当の中では、最も我々の生活に密着し、活躍しているといえよう。^{*④}鄒衍の説いた^{*⑤}『五徳終始説』を採用した各王朝は、その五徳の一徳に則した色を尊ぶことによって、自らがその徳に則していることを確認していた。また礼治主義である儒家は礼的秩序の一環として、五行思想に則した五色を^{*⑥}正色と定め、それ以外の色は非正当な色として用いなかったのである。

中国の伝統劇である京劇は、真面目で正義感のある役柄を演じる俳優は、青赤黄白黒の衣装を着けるが、悪役はそのほかの色を着用するというのだが、これもこういった思想に基づいたものだろう

う。

こうして五色は、中国古代からの基本色となり、中国人の色彩観念や美学思想、その色の持つ文化的意義に大きく影響したのである。

黄色の単語とその文化的意義

黄色は漢民族が最も崇拝している色の一つである。

二千年以上前から、中国は基本の色を「赤・青・黄・白・黒」の五色に分けている。この五色は「木・火・土・金・水」の五行を表し、五色は「東・西・中央・南・北」の五方をも表す。五行の中で「土」は、方角では中央、色は黄色で表す。

ゆえに黄色は中央の皇権と社稷を象徴し、同時にそれは万物が生長する土地をも象徴している。昔の中国人は、自分達が伝説上の帝王「黄帝」（「皇帝」と同じ音のため）の子孫だと意識し、黄色には特別崇高な思いを寄せていた。それゆえ黄色は帝王の色となり、古代帝王はみな黄色の着物を着ていた。そして庶民が黄色い服を着るのを禁止した。このような制度は大体隋唐の時代から始まったと言われている。民が用いるのを禁じ、黄色で権威を表したのである。五行思想による各方位のシンボルカラーでも、黄色は中央の象徴であった。

その後歴代の皇帝はみな黄色の着物を着用し、黄色は天子の専用色となった。例えば、帝王の住んでいた宮殿はみな黄色の瑠璃瓦を使い、宮内の玉座及びすべての装飾も黄色を用いた。

つまり黄色は古代からずっと中華民族を代表する色なのである。黄色は神聖・皇権・尊敬・崇高・威厳・土地・国土などの文化的意義が含まれているといえる。

特権者を「黄帶子」、政変を起こし、権力を掌握すること、皇帝の服を着せられ、天子の位に着くこ

とを「黄袍加身」と言う。

古人は黄色を永遠に変わることのない自然の色ともみなしていた。班固《白虎通義》の中には、「黄者、中和之色、自然之性、萬古不易。」とある。華夏漢族が古くから生活していた黄河流域は、漢文化の発生地でもある。ゆえに黄河は中華民族のゆりかごと称せられている。黄河は「黄龍」とも言われている。漢民族は数千年もの間黄河流域に生活し、黄色い大地を耕し、黄米を食し、黄河の水を飲んできた。黄色い肌をしている漢民族は、黄色と切っても切れない仲なのである。

「黄」の一文字だけで黄河を表すこともある。

「治黄工程」は黄河治水工事。「黄泛区」は黄河の氾濫区である。

黄色は黄金とも言われ、ゆえに富貴、煌びやかなものをも象徴している。

すばらしい日は「黄金日」、ゴールデンウィークは黄金周、素晴らしい月は「黄金月」、時間は金なりは「一刻黄金」、人生で最も素晴らしい時期は「黄金季節」、人の青春時代を「黄金时代」という。

他にも、「黄道」吉日、「黄道吉日」黄道吉日は、民間の信仰で、万事順調にいくとされる日であり、日本の大安吉日に当る。

中国の京劇の隈取では、黄色は勇猛な性格を表している。例えば、三国志の中に出てくる黄蓋、典偉などの隈取は黄色を主にしている。

漢末の太平道の首領、張角が組織した農民蜂起の軍は、全員黄色の頭巾を被っていたので、「黄巾軍」と呼ばれた。黄巾の乱である。

東漢時代、道家は黄（帝）老（子）の術を尊んでいたため、道教の道士の着ていた服も頭巾も黄色であった。仏教の法師の袈裟も多くが黄色である。仏教道教の経典は「黄卷」と言い、仏教信者の住居生活の状態（経典とほの暗い灯火なので）を「黄卷青灯」と言う。「黄教」はラマ教の一派で、現在のチベット仏教の主要教派で、僧は黄帽をか

ぶる。道教は「黄紙」を厄払いのお札とし、「黄紙」「黄表紙」「黄銭」を用いて神霊を祭る。神仏を祭る時に焼き、煙に変えて天に届けるのである。

黄色のマイナス的観念はアメリカから伝わってきた。18世紀以来、アメリカは、黄色い紙でポルノ本を印刷していたため、ポルノ本はイエロー本と呼ばれるようになった。それが中国に伝わり、そこから黄色には、反動、腐敗墮落、特に色情、猥褻な意味を含むようになった。

例えば、「黄活」（猥談）「黄色书刊」（ポルノ本）、「黄色画报」（ポルノ雑誌）、「黄色小说」（ポルノ小説）、「黄色电影」（ポルノ映画）、「黄色录像」（ポルノビデオ）、「黄色音乐」（腐敗墮落した音楽）、「黄色歌曲」（墮落した歌曲）、「黄色舞厅」（ポルノダンスホール）、「黄色酒吧」（ポルノバー）、「黄色咖啡厅」（ポルノカフェ）。ほかにも「黄源」「黄根」（墮落の根源）、「黄货」（猥褻物）、「黄窝」（墮落の巢窟）、「黄潮」（墮落の潮流）、「黄害」（ポルノの害）、「嗜黄」（墮落反動を味わう）、「販黄」（ポルノの販売）、「倒黄」「拒黄」（ポルノ拒否）、「造黄」（墮落反動的なものを造る）、「黄毒」（ポルノ的な毒）などがある。そしてこれら社会の上での公害（ポルノや風俗など）を一掃することを「扫黄」と言う。

黄色には、（約束などが）おじゃんになる、だめになる、ふいになる、商店がつぶれる、閉店する、信用ならない、あてにならない等の意味もある。例えば、

「买卖黄了」：商売がおじゃんになる。

「那件事黄了」：あの事はおじゃんになった。

「他这话黄」：彼のその話はあてにならない。

「黄牛」：①ダブ屋②話や事柄がおじゃんになること。おじゃんにすること。③当てにならない。信用できない。

また黄色には、日本で言う青い、青二才の意味がある。例えば、

「黄口」：黄色いくちばし。若造。

「黄口白牙」：よく考えずにものをしゃべること。

「黄口人」「黄口小」「黄口孺子」：経験に乏しい人。青二才。若造。

「黄毛丫头」：小娘。

「黄嘴牙子」：青二才。

「黄花」：未婚の男子、女子。「黄花女儿」：処女。

一方、草木が枯れて黄ばむことを「枯黄」ということから、元気のなさ、病弱も表した。

「焦黄」：つやのない病人の黄色い顔。

「脸色发黄」：顔色につやがない。（病弱で）顔がげっそりしている。

「黄面婆」「黄脸婆」：おかめ。おたふく。家の婆さん。自分の妻を称した。

「黄发」：老人の黄ばんだ髪の毛。転じて年寄り。

赤（紅）色の単語とその文化的意義

赤（中国語では、「紅」）は漢民族が最も好む色であり、またよく使用する色でもある。

漢民族は、古くから赤を好んだ。赤は太陽と火の色であり、太陽と火は人々に光と温暖を与えるので、人々は赤から、幸福や喜び、吉祥、楽しみ、熱烈を、一方で魔除けを連想し、象徴するものと考えた。そこから発展、発達、成功、順調、成就、生興などの意味をも持つようになった。

漢民族は伝統的な重大な祝日をお祝いする時、例えば、春節・元旦などの時には、玄関の門の両側に赤い対聯、春聯を張ったり、赤い福の字や春の字を張ったり、赤い切り紙を張る。また赤い灯笼を掛け、夜には赤いろうそくを灯し、赤い爆竹を鳴らす。慶事を象徴する赤い布を「紅」と言う。赤い布を飾り付ける事を「挂紅」と言う。

人々は、結婚を「紅事」とも称す。新婦は赤いドレス「紅袄」を着用し、頭には赤い頭巾を被り、新郎は赤い花をつけたり、赤いネクタイを締めた

り、赤い帯をかけたたりする。ドアには、やはり赤い「対聯」「紅対儿」や赤い「双喜字」を張り、部屋の中の至る所にも「双喜字」を張る。夜は赤い蠟燭を灯し、紅豆のお饅頭を食べる。お祝儀は、赤い紙に入れるので「紅包」と言い、プレゼントや招待状もすべて赤い紙を用いる。とにかく結婚の時は、「满堂紅」(①祝い事するとき、広間の表に飾る色絹を張った角灯籠・大燭台②満員) 至る所真っ赤で、赤はお祝い事の時には欠かすことの出来ない色である。子供が生まれた時も赤い卵「紅蛋」を配り、食べ、赤い腰帯をして、喜びや吉祥、幸福を表す。

赤は、発展、発達、順調、生興、成功、円満などの意味も持つので、企業やお店、展覧会開幕や落成式など様々な儀式においても、赤い飾りを施して、発展、成功や順調、円満を祈る。

この方面での常用単語にも、赤が使用されている。

順調や成功、または人から重視されたり、歓迎を受けることの象徴で、順調、幸運、人気がある、もてはやされているなどの意味がある。

「走红」(もてる、気に入られる、運が向く)「红运」「运气红」(幸運)、「开门红」(事が最初から順調に運ぶこと)、「那个影星很红」(あの映画スターはとても人気がある)、「红角儿」(〈旧〉人気俳優)「红极一世」(一世風靡)、「红人」「大红人」(人気物)、「很红」(人気がある)、「唱红了」(歌で人気がある)、「演红」(演技で人気がある)、「红得发紫」(大変な人気)など、時代の寵児、勢いに乗る人、社会的に人気がある、人々に愛されている、上司やリーダーに重要視されるなどの意味を含む単語が数多くある。「红姑娘」(〈旧〉売れっ子女子)「红舞女」(売れっ子のダンサー)「红星」(有名スター売れっ子スター)などもそうである。

他にも、美しいや女性の意味である「红颜」(美少年少女、美人)「红装」「红妆」(美しい装い、婦

人、婦人の化粧・飾り)「红货」(宝石類)「红男绿女」(綺麗に着飾った男女)「红女绿妇」(美装した夫人)「红颜」(美人)などがある。

他にも、「红利」(純益、割増配当金、利子、賞与)、「分红」(利益配当)や「红榜」「红桄」(①合格者発表の掲示②社会主義建設の功労者を発表する掲示板)、「红包」(祝儀)、「红货」(宝石)、「红日高照」(真っ赤な太陽が高く照らす、ということから吉日)、「红火」(賑やか、盛ん)、「红角」(工場にある娯楽施設)など良い意味で使われる場合が多い。

赤には、結婚の意味があるので、縁結びをする人を「红娘」、縁結びを司るとされる星を「红鸾」、良縁を得ることを「红鸾照命」と言った。

京劇では、赤い隈取をした役柄「红净」は忠誠心にあふれた勇敢な人物を表す。例えば関羽などがそうである。今でも義侠心に富む熱血漢を「红脸汉子」と呼ぶ。

赤の成功、順調、人気がある、重要視されるということからだろうか、羨望や嫉妬等の意味もある。

「眼红」(目が血走る、怒る)、「红眼」「红眼病」(眼を赤くして、血走り、妬む)がそうである。

仏教は、この世のことを「红尘」(繁華雑踏の意。転じて俗世間)「看破红尘」(浮世を見限る)「迷恋红尘」(繁華雑踏な俗世間を恋しがる)「堕入红尘」(繁華な俗世間に陥る)と言う。

赤はまた戦火や鮮血をも連想させる。革命闘争は往々にして流血闘争であるので、近代は赤色で革命闘争を象徴するようになった。

「红色」：共産主義的。革命的。

「红色歌曲」：社会主義革命の熱情に満ちた歌。

「红卫兵」：1965、66年の文化大革命に際し、1966年8月20日から始まった実力行動を担って活躍した中高生を中心とする集団。工・農・兵革命幹部・革命烈士の子弟で学習成績の優れているこ

とを条件として選ばれた。

「红旗」：赤旗。プロレタリア階級の革命の目印。共産主義の象徴。

「红军」：赤軍。中国第2次国内革命戦争の時、中国共産党の指導を受けた中国工農红军中国労働赤軍。

「红区」：革命地。

「红都」：革命の都。

「红心」：共産主義に徹した心。

「红领章」「红袖章」「红领巾」：文革中、紅小兵や少年先鋒隊の赤いネッカチーフから彼らの物を指した。

「红小鬼」：革命の申し子。

「红色政权」：赤色政権。

「红色娘子军」：若い女性の革命軍。

「红色宣传员」：共産主義を宣伝する人員。

「红色根据地」：革命根拠地。

「红五月」：赤い五月。五月は社会主義運動や革命運動に関連のある日が多いことから。

「红宝书」：文革中毛沢東語録や毛沢東選集を指した。

「红五类」：労働者・貧農・下層中農・革命烈士・革命的幹部及び解放軍の子弟。文革最初の段階での紅衛兵メンバー。

「红勤巧俭」：共産主義思想がしっかりしており、仕事に熱心で、技術に優れ、節約を心がける。

「红透专深」：共産主義思想に徹していて、技術面も非常に優れている。

「红秀才」：学問が優れているのみならず、共産主義思想のしっかりしているインテリ。

「红与专=红专」：[红]共産主義と政治。[专]専門の業務と技術。

「红与大学」：公社幹部の共産化・専門化を解決するために設けられた学校。

これらの単語の多くは、文革中に現れたものが多く、文革中はよく使用された。

他にも「红色专家」（思想的にも立派な専門家）、「又红又专」（政治面・思想的に優れ又技術面でも優れる）、「只专不红」（専門的に技術が優れているだけで、政治的に優れていない。）などがある。

また国民党時代に進歩的な人々が赤のレッテルを貼られるのを「被戴红帽子」と言った。

黒色の単語とその文化意義

黒色は、古代では尊敬、剛毅、厳正、実直、神秘などのプラスの意味だった。黒色は夏代と秦代には崇高な正色とされていた。夏・秦代の官服、礼服、祭服はみんな黒色であった。

黒色と鉄色は似ているので、黒は往々にして、剛毅厳正鉄面無私などの意味を持つ。

京劇の隈取芸術では、黒い隈取は、剛健実直、厳正無私な性格を象徴している。例えば、宋代の包青天などの歴史的人物は、黒の隈取をしている。

五行説では、黒は北方、水を表す。

黒は夜の色から、暗黒、死亡、邪悪、陰險、恐怖などのマイナスに意味もある。

文革の時期、黒色は反革命、反動などの意味を持っていた。当時は打倒されるべきもの、批判された対象には、ほとんど黒の字がつけられ、政治的色彩のマイナス的要素の強い言葉であった。

例えば、

「黒帮」（秘密の反動組織）、「黒会」（悪事を企てる会合）、「黒秀才」（文革時、毛沢東の反対者だと見なされた知識人に対するのしり言葉）、「黒文章」（反動的な文章）、「黒五类」（文章中、革命的な「紅五类」（労働省・貧農・下層中農・解放軍兵士・革命幹部・革命烈士）に対し、地主・富農・反革分子・悪質分子・ブルジョワ右派分子を指した。）

黒は邪悪、陰險なものを表す。

例えば、

「黒手」（魔の手）、「黒心」（悪心、陰險で残忍、腹

黒い),「黒爪牙」(魔の手)
また違法や欺瞞などの意味もある。
「黒社会」(極道),「黒戸」(正式に戸籍に登録されていない世帯),「黒人」(日陰者),「黒孩子」(無戸籍の子),「黒貨」(①盗品密輸品など不正な手段で入手した品。②アヘン),「黒市」(闇市、泥棒市、闇取引),「黒名单」(ブラックリスト)
黒には、あくどい手口ややり方をも言う。「手狠心黒」である。
他にも以下のような単語があり、すべて反動的、邪悪、秘密、闇の意である。
「黒白」:正邪。是非。善悪。
「黒榜」:ブラックリスト。
「黒道」:悪の道。
「黒道日」:悪日。凶日。
「黒地」:登記をせずに隠している土地。脱税地。
「黒点子」:陰険・邪悪な考えややり方。
「黒店」:旧時、旅客を害し金銭を奪う目的で悪者の開いている旅店。
「黒飯」:①旧時、アヘンの異称。②泥棒を働く
「黒房子」:牢獄。
「黒鍋」:無実の罪。濡れ衣。
「黒戸」:やみ世帯。
「黒話」:隠語。
「黒活」:秘密の仕事。
「黒老虎」:その土地に縄張りを持っている悪玉。
「黒着良心」:良心を曇らす。
「黒路」:悪の道。
「黒面」:質の悪い小麦粉。
「黒幕」:暗い内情。
「黒钱」:不正なお金。賄賂。
「黒人」:日陰者。内通者。秘密工作者。
「黒商」:闇商人。
「黒上了」:良くないことに迷ってしまう。良心が曇る。
「黒市」:闇市。

「黒手」:黒い手。魔の手。
「黒窩」:悪者の巢窟。
「黒线」:反動的な路線。
「黒心」「黒心肠」=「黒心肝」=「黒心眼」:陰険で残忍で、腹黒い。
「黒样板」:否定的なものの見本。反面教師的なものの。
「黒帳」:公開しない勘定・帳簿・裏帳簿。隠れた負い目。
「黒瓜子」:黒い手。
「黒吃黒」:ならず者の鞆当
「黒不提白不提」:黒とも言わず、白とも言わず。言うべきことは何も言わない。
「黒差」:無駄な役目。

白の単語とその文化的意義

白色は、白雲、白雪、白玉と同色ということから、白色は、高潔、純潔、明亮、清潔、高貴、公明などを表す。「清白无邪」,「洁白如玉」,「白璧微瑕」,「白鶴仙子」,「白衣仙子」,「白衣秀士」などがそうである。

古代の迷信な人々は、突然現れる白色の獣を吉祥とみなした。「白鹿」「白鶴」「白狼」「白雉」「白燕」「白雁」などがそうである。

白色には、低俗、反動、凶、愚鈍の意味もある。中国は漢代から唐宋代には、一般庶民を「白衣」と呼び、白い衣を着させていた。古代において地位や名誉のない人を「白丁」と呼び、貧しい人の家を「白屋」と呼ぶ。

白色には、葬儀の意味がある。葬式を「白事」と言う。これは五行思想と関連がある。五行では、白は金に属し、方位では西方は虎に属し、人々は凶悪な人を「白虎星」と呼び、白を凶兆とみなす。西は秋に属し、秋は葉が枯れ人に悲壮感を与える。古代では、犯罪者を処刑するのに秋にするそうだ。

秋を代表する白や西は、不吉とされる。「一命归西」(命が西に帰るということから、死亡するの意。)という言葉からもわかる。

親族が亡くなると、家族は白い服を着る。白い霊堂を建て、白い紙をばら撒く。

白色には、衰退、腐敗、反動、落後などのマイナスの意味がある。

白色はちょうど赤色に相反している。革命的なものを「赤(紅)」と呼ぶことに対して、反動的なものを「白」と呼ぶ。過去には国民党統治区を「白区」、反動政府を「白色政権」、反動政府の軍を「白軍」、人民を殺害した人を「白匪」「白狗」。反動派が革命者を殺戮し、政策を鎮圧したことを「白色恐怖」。

時には、資産階級をホワイトカラーという。五十年代、高等学校が資産階級や専門家教授の学術思想を批判したことを「抜白旗」と言った。

当時政治に関心がなく、研究にだけ没頭する人を「只専不紅」「白専道路」と言った。

白色には、失敗、徒勞、愚鈍などの意味もある。例えば、戦争中失敗した方が白旗を掲げて、投降を表す。

愚鈍な人や知力の低い人を「白痴」という。

白色は、芝居の隈取では、邪悪や陰険を象徴している。例えば秦代の趙高、三国時代の曹操などの人物がそうである。

以下の単語もすべて反動的、無駄などマイナスな用法である。

「白鼻頭」：反逆者。スパイ。

「白鼻子」：ずるい人。

「白不了」：無駄になることない。

「白吃」：ただで食べる。

「白吃猴」：人にたかって食べる人。

「白搭」：無駄にする。

「白地」：空き地。荒地。反動派が占拠している地域。

「白丁」：出世の望みがない人。家柄の良くない人。一般人。

「白费」=「白耗」：無駄に費やす。

「白花」：ほらを吹く。出まかせを言う。

「白狗子」：反動派。敵の手先。

「白话」：出まかせ。

「白頼」：ごまかして言い逃れる。ごねる。言いがかりをつける。

「白臉」：敵役。旧劇でするい男は顔を白く塗る。青二才。若僧。

「白忙」：骨折り損をする。忙しいだけで徒勞に終わる。

「白磨」：無駄に費やす。

「白跑」：無駄足を踏む。

「白陪」：丸損する。

「白旗」：白旗。ブルジョア思想や反革命の象徴。

「白扔」：利用しないでほっておく。無駄にする。

「白色」：反革命の象徴。

「白水」：ただの水。

「白说」：無駄に話す。

「白死」：無駄死にする。

「白送」：ただで送る。無駄に過ごす。無駄に使う。

「白眼」：侮蔑的なまなざし。

「白要」：ただでもらう。

「白専」：専門バカである。思想性がなく専門だけである。

青や緑の単語とその文化的意義

青は、中国語では「藍」「青」「緑」と言う。

五行説では、木に属し、方角では東に属す。

青の定義は広く、日本で言う緑や黒も青ということがある。

青のイメージは、空や水、木々の青さから、清廉潔白を意味し、宋代の裁判官の包丞は、その清

廉潔白なことから「包青天」と呼ばれ、現代もドラマ、映画や劇で演じられるほどの人気だが、その顔は真っ黒である。昔、黒は青と同じように考えられていたため、黒い顔で彼の清廉潔白さを表したのである。

しかし青は、緑と同義と考えられてもいたので、緑や青の隈取は凶悪な人物を表すものであった。

青は、浅藍色、黒色、緑色、青草、青い作物、若いという意味がある。そのイメージから様々な単語が生まれている。

「藍本」：原本。

「藍脾气」：大人しい性格。

「藍皮書」：英国政府の刊行する外交文書。

「藍青」：純粹でないもの。似て非なるもの。青と藍では似ているが、違う色から。「～官話」：似て非なる、訛りが多い標準語。

「蓝天」：青空。

「青眼」：黒い目。白い眼の反対で、親しみのある愛情に満ちたまなざし。

「青目」「青睞」「青盼」：特別な目。好意。

「青餅子」「青皮」：不真面目で生意気な人間。

「青娥」：眉の別称。美女に例える。

「青儿」：青草。青い作物。

「青工」：青年労働者。

「青紅皂白」：黒白。善悪。物のけじめ。「不分青紅皂白」：罪悪を分けない。

「青出于藍」：弟子の学問が師に勝っていることを言う。

「青春」：青春。

「青天」：青空。清廉潔白。

「青年」：青年。

「青梅竹馬」：幼馴染。幼少の頃。

「青面獠牙」：物凄く恐ろしい人相の形容。青黒い顔と蛮族のような歯を持った人。

「青天白日」：からりと晴れて太陽が輝いている、晴れ晴れとして心に曇りが無い。

「青云」：徳望の高い人。高位高官の形容。

「青云直上」：栄進する。

「平步青云」：一挙に最高の地位まで到達する。

「青山緑水」：緑の山、青い水。

「青出于藍，而胜于藍」：青は藍から製したのに藍よりも青いことから、弟子の学問が師に勝っていることを言う。

「青葱」：植物が青々としている。

「青翠」：青々とした。緑したたる。

「青灯黄卷」：ほの暗い灯りと經典の生活。出家した人の生活環境の例え。

「青工」：青年労働者。

「青黄不接」：前年の穀がなくなり、新穀がまだでないこと、つなぎがうまくいかないこと。

「青醬」：なまみそ。この「青」とは、なにも加えてない単純と言う意味。

「青衿」：秀才。旧時読書人が身につけた黒襟の衣服から。

「青衣」：古時、賤者の服。

「青楼」：妓楼。

「青苗」：作物の新芽。

「青皮」：ごろつき。遊び人。チンピラ。

「青头儿愣」「愣头儿青」：世間知らずの馬鹿者。

漢民族の文化の中で、緑色も人々に好まれる色である。

緑色は「青」とも言う。「青草」「青山」「青松」「青菜」「青苗」「青果」がそうである。

緑色は、春・草木・森林・湖・ひすい・エメラルドなどを連想するので、昔から緑は、春・青春・平和・希望・安全・幸運・新鮮などを象徴した。

中国語では、青信号を「緑灯」と言い、安全に通行できることを表し、「开绿灯」と言う言葉は、上司が部下にある種の許可もしくは便利な条件を与える意味がある。

古代中国では、不名誉・下賤・低俗の意味もあ

った。唐代官制の規定では、官七品以下は緑の服を着せられたが、それは「青衫」と言った。

宋元時代でも緑衣、緑頭巾は、低俗な職業と言われる役者や芸人などの服装であり、元明時代には、売春婦や歌楽の男子も緑頭巾を被らされた。

京劇の隈取では、緑色は大体凶悪を表した。

以下は、緑のイメージから来る単語である。

「绿灯」：青信号

「绿茸茸」：一面に青々と密生しているさま。

「绿葱葱」：ねぎなどが青々としている

「绿油油」：青くつやつやした、深緑。

「绿莹莹」：緑細やかなさま。

「绿帽子」「绿头巾」：妻の不義を知らない或いは黙認している亭主。昔、妓女の家族を一般のものと区別するため緑の頭巾をつけさせていたことがあり、明代には、妓楼の主人がつけていた。

「绿鬢」：少年の髪が黒いこと。

「绿云」：美しい黒髪。

「绿洲」：オアシス。

「绿叶成阴」：緑の葉が繁って木陰を作る。若者も大人になって多くの親になること。嫁に行った娘に子が生まれること。子供が多く、多福なこと。

「绿衣黄里」：正しい表地である黄色を裏地にして、裏地たるべき緑地を表にする。是非善悪を取り違える。その任にあらざるものがのさばる。

結

中国では、基本の五色—黄赤白黒青（緑）だけでも、これだけ多くの色を使用した単語があり、それらは色そのものを表しているだけでなく、そこからイメージされる様々な事柄をも表すことがわかる。しかもほとんどの色名詞が、単に一つの意味だけではなく、プラスな意味とマイナスな意味を持ち合わせているのが興味深い。

最後にいくつか単語を取りあげる。以下の単語

は、二つ以上の色を使ったものである。

「红红绿绿」：色とりどり

「红绸绿缎」：色とりどりの絹織物。

「红绿绒」：色物の織物。

「红男绿女」：綺麗に着飾った若い男女。

「红女绿妇」：美装した夫人。

「红黄不分」：赤も黄も区別しない。訳が判らない。

「不分黑白」：白黒分けない。是非を明らかにしない。

「红肥红瘦」：（女性の色々な服装や太った人やせた人など）色とりどり。

「红口白牙」「红嘴白牙」：口の美しい形容。うまい事を言う。

中国の寺院古代の衣装絵画陶芸などを見ても、中国人は豊富で濃厚な色彩感覚を持ち合わせているのがわかるが、それが言語にも表れているのである。

注

①『呂氏春秋』十二紀と『礼記』月令篇の内容はほぼ同一であり、月令篇は十二紀の借用だといわれている。その十二紀の最初の篇、孟春紀には、春三ヶ月の最初の月、正月の日月星辰の天体の動き、それに対応した物体の状況、及び社会の行動の基準を示したものが、すべて五行説の木徳に従ったことが書かれている。天子は春の到来とそれが木徳であることを知らされると、木徳にあたる春の確実な到来を確認するために、太史に命じて天体を観察させ、日月星辰の規則正しい運行を確認して、初めて木徳を人々の頼るべき常則としたのである。こうしてその後の仲春紀・季春紀・孟春紀・仲夏紀・季夏紀・孟秋紀・仲秋紀・季秋紀・孟冬紀・仲冬紀・季冬紀もみな同じように、春は木徳、夏は火徳、秋は金徳、冬是水徳、そし

て春夏秋冬それぞれの中間に土徳の支配する時期がある。それらはそれぞれ五行に基づいた五徳の一徳によって支配され、その徳に支配されている間はすべてがその五行の一徳に従わなければならないのである。

②『白虎通』「王者所以有社稷何。為天下求福報功。人非土不立，非穀不食，土地廣博，不可偏敬也。五穀眾多，不可一一祭也。故封土立社，示有土也，稷五穀之長，故立稷而祭之也。」

③『禮記』〔曲禮上〕「行，前朱鳥而後玄武，左青龍，而右白虎，招搖在上，急繕其怒。」

④『史記』〈孟旬列傳〉「鄒行睹有國者益淫侈，不能尚德。……乃深觀陰陽消息，而作怪迂之變，終始大聖之篇，十餘萬言。……稱引天地剖判以來，五德轉移，治各有宜，而符應若茲。」

⑤『史記』〈封禪書〉「秦始皇既并天下而帝，或曰，黃帝得土德，黃龍地蚺見，夏得木德，青龍止於郊，草木暢茂，殷得金德，銀自山溢，周得火德，有赤鳥之符。今秦變周，水德之時，昔秦文公出蠟，獲黑龍，此其水德之端。於是秦更命河曰德水，以冬十月，為年首。色上黑，度以六為名，音上大呂，事統上法。」『呂氏春秋』有始覽應同篇「凡帝王者之將興也，天必先見祥乎下民。黃帝之時，天先見大蚺大螻。黃帝曰，土氣勝。土氣勝，故其色尚黃，其事則土。及禹之時，天先見草木秋冬不殺。禹曰，木氣勝。木氣勝，故其色尚青，其事則木。及湯之時，天先見金刀生於水。湯曰，金氣勝。金氣勝，故其色尚白，其事則金。及文王之時，天先見火赤鳥。丹書，集于周社。文王曰，火氣勝。火氣勝，故其色尚赤，其事則火。代火者必將水。天且先見水氣勝，水氣勝，故其色尚黑，其事則水，水氣至，而不知數備，將徒于上。」

『文選』〈魏都賦〉李善注に引かれた『七略』に「子有終始五德，從所不勝，木德繼之，金德次之，火德次之，水德次之。」

『孫子』虛實篇「水無常形，能因敵變化，而取勝者

謂之神，故五行五常勝，四時無常位。」とある。つまり五行とは五種の自然な力であり、その力には盛衰があり、天道人事は皆その盛んな時にはこの五徳のうちの一徳の勢力に支配されるが、その運が尽きると、それに代わる別の一徳がこれに継いで隆盛に導くのである。王朝の交代も例外なくこれに当てはまることから、鄒衍は歴代の王朝を土木金火水の五徳に配し、これらを後のものが前に位するものに勝つ（木は土に、金は木に、火は金に、水は火に勝つ）という五行相勝によった王朝交代原理を説いたのである。

⑥『論語』陽貨篇「子曰，惡紫之奪朱也。」とあるが、ここで出てくる紫と朱について朱子は「朱，正色。紫，間色之好者。」と説明している。『礼記』玉藻篇に「衣，正色，裳，間色。」とあるが、『疏』に「皇氏云，正謂青赤黃白黑五方正色也，不正謂五方間色也，綠紅碧紫駟黃也。」とある。これら間色は『論語』郷党篇に「紅紫不以褻服」とあるように日常の衣服にも用いられなかったのである。

参考文献

- | | |
|-----------|---------------|
| 『汉语词汇与文化』 | 常敬宇編著 北京大学出版社 |
| 『中日大辞典』 | 愛知大学中日大辞典編纂処編 |
| 『現代中国語辞典』 | 香坂順一編著 光生館 |
| 『中日辞典』 | 小学館 |